

地球のなかまたち

part Ⅱ

ティム君はお兄ちゃん





コアラのティム君は、近頃うれしい反面、少しゆううつです。

新しい家族ができたのです。

そうなんです。 ティム君に弟ができたのです。

お母さんは弟のチャム君にべったりで、ティム君はかなり不満です。

以前はお母さんのそばで遊んでいたティム君も、今では木の上で一人でいじけています。

「あーあ、つまんないの。 僕だってお母さんと一緒にいたいのに」



「あ、お母さんだ」

木の上から見下ろすと、お母さんがチャム君をおなかに抱えてとなりの木に登っています。

まだ一人では木登りができないチャム君は、しっかりとお母さんにつかまっています。

落ちてしまっは大変です。

「おかあさーん」

ティム君は大きな声でお母さん呼びました。



お母さんは登るのに一生懸命でティム君の声が聞こえないようです。

「おかあさーん」

ティム君はさっきより、もっともっと大きな声で叫びました。

「はいはい。聞こえてますよ。 そんな大きな声を出すとチャムがびっくりするじゃないの」

お母さんはティム君に注意しました。

「チャムがおどろいて落ちるといけないから、もう少し小さな声で呼んでね」



ティム君は少し悲しくなりましたが、気を取り直して小さな声で言いました。

「ぼくね、木から木へ飛び移れるようになったんだよ。すごいでしょう」

ティム君はお母さんに見てもらいたくて、たくさん練習したのです。

「見ててね。お母さん」



ティム君は、えいやっとばかりに隣の木に飛び移りました。

少し自信がなかったのですが、うまくいきました。

ティム君はとても満足でした。

「すごいでしょ。おかあさん」

ティム君はじまんげに言いながら、お母さんの方を振り返りました。



ところがお母さんはティム君を見ていませんでした。

チャム君を背中に乗せて、反対の方向に歩いて行ってしまいました。

ティム君の声があんまり小さかったので、お母さんには聞こえなかったのです。

でも、そんなこととは知らないティム君は、とてもがっかりしました。

「お母さんはぼくのことなんか、もうどうでもいいんだ・・・」



ティム君は悲しくなっとなみだが出そうになりました。

「チャムなんかだいきらいだ」

ティム君は心の中で何回もさげびました。

「お母さんなんかだいきらいだ。チャムなんかだいきらいだ」

そして、遠ざかっていくお母さんとチャム君をじっと見ていました。



ティム君の目からなみだがポトンと地面に落ちました。

「ティム君。どうしたの？」

友達のララちゃんです。

ティム君は泣き顔をかくすために、あわてて地面に鼻をこすりつけました。

泣いている所をララちゃんに見られたら最悪です。

「地面に何か落ちてるの？」

ララちゃんも地面に鼻をつけました。

顔をあげると二人とも鼻も顔も砂だらけになっていました。

二人はおたがいの顔を見て大笑いをしました。



ティム君はすっかり元気になりました。

「ララちゃん、木登りして遊ぼうよ」

「木登り？ 私あんまりしたくないわ」

ララちゃんは木登りが得意ではないので、気乗りがしないようです。

「ぼくが教えてあげるから大丈夫。上手になるよ」

ティム君は熱心にさそいます。「ぼくの後からついてくるんだよ」

ティム君はスルスルと近くの木に登り始めました。

帰ろうとしていたララちゃんは立ち止まりました。

後ろをふり返りながらティム君のすがたをながめています。



ララちゃんも木に登ろうと戻ってきました。

「ここに足をかけて、こっちの枝にしっかりつかまって・・・」

ティム君は熱心に教えます。

ララちゃんもおそるおそる登ってきました。

ティム君はお母さんのこともチャム君のこともすっかり忘れてしまったようです。

「ララちゃん、がんばって！」



ララちゃんだってコアラです。

本当は木登りだって上手なはずです。

今までは、ほんのちょっとだけおくびょうだったのです。

だんだんと木に登るのもはやくなってきました。

「そう、 そうだよ。 上手だよ」

ティム君は、はげまします。

時々足をふみはずしそうになるララちゃんを、後ろから支えてあげます。

ララちゃんは安心して上へと登ることができました。



今度は、ティム君が先頭に立ち、スルスルと登っていきました。

枝のふたまたになっているところにすわって、ララちゃんを待ちます。

ララちゃんはひとりで登ってきました。

「ララちゃん、すごーい。もう一人で大丈夫だね」

「ありがとうティム君。もう木登りはこわくないわ」

ララちゃんはにっこりと笑いました。

ティム君も幸せな気持ちになりました。



二人で木のとっぺんまで登り、辺りを見回しました。

遠くまで良く見えます。

「見晴らしが良くて、気持ちいいだろう？」

ティム君に言われてララちゃんはずきしました。

高いところからあたりをながめるのは、とても気持ちがいいことだとララちゃんも知ったのです。

「あそこにもっと高い木があるわ。あっちにも登ってみたいわ」

「よし！ 行って見よう」



ティム君とララちゃんは木からおりました。

「あの木だね？」

ティム君はさっきの木をさして、かくにんしました。

あの木ならララちゃんでも登れそうです。

「じゃ 行ってみようか」

二人は高い木をめざして走り始めました。



ティム君とララちゃんは高い木に登り始めました。

ララちゃんだって スルスルと登れます。

もう後ろからおさえてもらわなくたって大丈夫です。

二人は上のほうまで登っていきました。

「さっきより、ずっとずっと高いわ」

ララちゃん是这样ふんぎみです。

「ララちゃん、ここでちょっと待ってて」

ティム君はひとりでもっと高い枝へと移っていきました。



ララちゃんは、さっきティム君がしていたようにふたまたの枝に腰かけました。

ティム君は何をするつもりなのでしょう。

ララちゃんはティム君の姿を目で追いました。

スルスル、スルスル、とティム君は高く高く登っていきます。

「大丈夫かしら……」

ララちゃんは心配になりました。



「おーい ララちゃん 見ててよー」

ティム君の声が聞こえます。

ララちゃんは目を見はりました。

どうやらティム君は木から木へと飛び移るつもりようです。

「ティム君 無理しないでね」

ドキドキしながら、ララちゃんは返事をします。

「大丈夫！ ちゃんと見てるんだよ」



ララちゃんの前で失敗はできません。

エイ、ヤッとティム君はとなりの木まで飛びました。

成功です！

さっきより上手に飛べました。

パチパチパチパチ。

ララちゃんは大きな拍手をしました。

「すごいね、ティム君！」

「こんなの簡単さ」 ティム君は少しほこらしげに答えました。



ティム君を見ていたのはララちゃんだけではありませんでした。

「おにいちゃん、かっこいいー」

お母さんと弟のチャム君も見ていたのです。

「ぼくも早く飛べるようになりたいなー」

チャム君はそんけいの目でお兄さんを見つめました。

「チャムもぼく位大きくなったら飛べるさ」

お母さんもティム君の成長ぶりにおどろいたようです。

「ティムもすっかりお兄ちゃんになったのね」



お母さんはチャム君をずっと抱えていたのでつかれたのでしょうか。

木の枝にすわって休息の時間のようなのです。

右足をあげてポリポリと顔をかきはじめました。

チャム君をせおって移動している間は、かゆいのをがまんしていたのです。

チャム君はお母さんの足にはさまれて顔がゆがんでしまいました。

「おにいちゃん、助けて……ウググググ」



「あはははは」 ティム君は大きな声で笑いました。

「一人で歩けるようになったら、そういうこともなくなるさ」

ティム君は弟のチャム君をととてもかわいいと思いました。

そしてお母さんも大変なんだなと、さっき大きらいだと思ったことをこうかいしました。

ティム君はチャム君にウィンクをすると、ララちゃんと一緒に別の木へと遊びに行きました。

おわり